

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 18 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370627

研究課題名(和文) ダイナミック・アセスメントに基づく英語教育の指導・評価枠組みの開発

研究課題名(英文) A pedagogical framework based on dynamic assessment in English language teaching

研究代表者

吉田 達弘 (YOSHIDA, TATSUHIRO)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：10240293

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、社会文化的理論に基づいて開発されているダイナミック・アセスメント(DA)を、英語授業実践における「教師による生徒の言語パフォーマンスの見立て(アセスメント)と将来の動的(ダイナミック)な発達の可能性への援助」と位置づけた。その上で、DAの理論にもとづいた実践枠組みを開発し、学校教育現場で行われている英語授業および英語学習の場面で実施し、その効果を検証した。具体的には、社会文化的理論に関する先行研究の知見に基づき、英語の一斉授業、あるいは、英語学習でのグループワークといった多人数の相互行為におけるDAの教育的効果を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study examined the application and effectiveness of dynamic assessment (DA) in the EFL classrooms. DA has been developed based on Vygotsky's theories of human development (i.e. Sociocultural Theory), which insists that human development is possible with the provision of mediation by the experts or peers in a particular activity. In this study EFL lessons were implemented by middle school teachers, who share the framework of DA with the researchers. DA and Interactions in the lessons were analyzed with Conversation Analysis. The results showed that DA is a pedagogically effective way of assisting learners' development even in the whole class situations or in the group work situations. Also the study revealed the processes in which students actively participated in the conversation with the teachers and shaped Zone of Proximal Development in a collaborative way.

研究分野：外国語教育

キーワード：ダイナミック・アセスメント 社会文化的理論 英語教育学 会話分析 教室のディスコース 授業研究

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、北米を中心とした第二言語習得研究では、従来の認知主義(cognitivism)に基づく言語習得の見方だけでなく、言語使用者の社会的相互行為に言語発達の起源があると考えられる社会文化理論(Sociocultural Theory)に代表されるような知識や発達の源泉を他社との社会的相互行為に求める発達理論が提唱された。

ヴィゴツキーの高次精神機能の発達理論にその起源を持つ社会文化的理論では、学習者が単独で遂行できる「現下のパフォーマンスのレベル」と、教師の援助や他の学習者との協同により遂行できる「明日のパフォーマンスのレベル」の差である「発達の最近接領域(Zone of Proximal Development: ZPD)」に注目する。学習者が「明日のレベル」に到達できるよう発達を促すためには、教師或いは援助者が、目の前の学習者のもっとも適切な援助(あるいは、媒介[mediation])を与えることが必要となる。つまり、これまでの発達理論のように、学習者の成熟、あるいは、年齢的発達を前提とし、教授・学習が行われるのではなく、すぐれた教授・学習は、常に先回りして、発達を導くという考えである。

上記のような理論に基づき、学習者の発達を支援する方法の1つとして提唱されているのが、ダイナミック・アセスメント(Dynamic Assessment, DA)である。DAは、当初、心理学研究、あるいは、特別支援教育の分野で大きな成果を見せているが、近年、算数・数学、理科など教科教育でも研究がおこなわれるようになってきている。外国語教育研究においては、ペンシルバニア州立大学の Jim Lantolf と Mat Poehner を中心として研究が進められている(Lantolf & Thorn, 2006; Lantolf & Poehner, 2011; Poehner, 2008; Davin, 2011 など)。しかし、わが国における英語教育研究におけるDAの研究開発は、数例しかないため、更なる研究が必要となっている。

2. 研究の目的

本研究では、ヴィゴツキーの発達研究及び社会文化的理論を基盤とするDAを、児童・生徒の外国語の発達を促す教師の支援やインタラクションの原理、すなわち、授業実践における「教師による生徒の言語パフォーマンスの見立て(アセスメント)と将来の動的(ダイナミック)な発達の可能性への援助」と位置づける。その上で、DAの理論にもとづいた実践枠組みを開発し、学校教育現場で行われている英語授業および英語学習の場面で実施し、その効果を検証することを目的とする。そのため、まず、DAに関する文献研究を行い、これまでの研究で明らかになっていること、また、今後の課題となっていることを洗い出す(吉田, 2014)。先行研究からの知見に基づき、本研究では、英語の一斉授業、あるいは、英語学習でのグループワーク

といった多人数の相互行為におけるDAの教育的効果を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

いずれの取り組みにおいても、英語の一斉授業、あるいは、英語学習でのグループワークといった多人数の相互行為におけるDAの教育的効果を明らかにするために、実際に、英語授業や学習場面での参与観察を行った。その際、授業における相互行為を、複数のビデオカメラやボイスレコーダーで記録し、それを文字おこしし、トランスクリプトを作成した。複数のビデオカメラやボイスレコーダーを使用したため、記録された動画音声データを同期・統合するためにPlural Eyesを活用した。また、質的分析ツールとしてTransanaを使用した。分析の手法としては、会話分析を用い、相互行為の様子を詳細に記述、分析した。また、分析の際には、社会文化的理論の立場から、教師が学習者の発話に対してどのように反応しながら支援を与え、集団的なZPDを構成しているか、という点を中心に分析を進めた。

なお、研究に協力いただいた学校および関係者には、生徒個人のプライバシーの保護に努めることを伝え、ビデオや音声の記録、発表に関するインフォームドコンセントを得た。

4. 研究成果

本報告書では、研究成果として、(1) 中学校の英語授業における集団的DA実践1、(2) 中学校の英語授業における集団的DA実践2、(3) 中学校の英語授業におけるチーム・ティーチング実践、(4) 中学校での英語授業のグループワークにおける生徒間でのDAについて報告する。

(1) 中学校の英語授業における集団的DA実践1(吉田・荒木, 2013)

目的: 本研究は、DAの原理、援助の水準等を理解した中学校の英語教師が授業の中でDAを意識して生徒とやりとりを行うことで、1対1ではなく、多人数のクラスにおいても、ZPDを構成できるようなDA実践が可能かどうかを観察・分析した。

実施時期および対象: 実施時期は、平成25年4月~6月、対象は、公立中学校2年生(男子16名、女子17名)のクラスであった。

手続き: 研究者の側から、英語授業を担当する教師にDAの基本的原理を教授し、介入型アプローチ(Lantolf & Poehner, 2011; Poehner, 2008)を採用した。介入アプローチでは、教師が生徒とのインタラクションに臨む際に、与える援助の水準をあらかじめ準備し、子どもの反応に応じて、その時にもっとも適切だと判断される援助を与えるというものである。今回の研究では、以下のような援助水準を共有した。

- 援助1 沈黙する(「ん?」という表情)。
 援助2 誤りを含む句を質問調で反復する。
 援助3 誤りとなっている語を指摘する。
 援助4 A or B 選択肢を与える。
 援助5 正しい表現を教える。

授業担当教師には、教師が生徒と1対1のやりとりを行いながらも、教室の他の生徒もそのやりとりに参加可能な相互行為となるよう配慮してもらった。

分析および結果：授業担当教師が、介入アプローチを意識して授業に臨んだ結果、以下のようなやりとりが観察された。

事例1 (“Playing homework”)

- 7 T: what were you doing then, what were you doing at five o'clock yesterday?
 8 S?: なにしとったかな
 9 S?: 部活してた
 10 S?: I playing game. I playing video game.
 11 T: For example, at five o'clock in the afternoon yesterday, A-kun, what were you doing?
 12 A: I was mmm... homework, playing homework mm =
 13T: = playing homework
 14 SS: doing, doing
 15 T: ん? ん?
 16 S3: studying. 勉強してたんやから
 17 T: studying? doing? homework? (Aに視線を向けて) Good try. がんばってますね。
 18 I was playing homework. 宿題で遊んでた。
 19 SS: (silence 2 second) (Laughter)
 20 T: 宿題のノートでうーんって、飛行機作ってビューン
 21 宿題, 宿題を遊んでた
 22 (Aに向かって) 聞こえた。何かお助けしてくれてたの。
 23 I was ...
 24 S4: study
 25 S5: study
 26 studying homework?
 27 T: (右手で惜しいというジェスチャー) close but..
 28 S?: 宿題を勉強していた
 29 T: 宿題を勉強する。umm...?
 30 B: 「する」なんだから, do, do, do, do
 31 T: (Bを指さして) Bさん, お願いします。
 I was ... I was
 32 uh-uh
 33 B: Aが?
 34 T: うん。助けてあげて。
 35 B: I was doing homework.
 36 T: I was doing homework. または, I was doing MY homework.
 37 もしかしたら, Cさんのをしてあげているかもしれないし。うーんって。

- 38 Cさん, 頼まへんかもしれない。わからない。
 39 Ok, one more chance, A-san. What were you doing at five o'clock yesterday?
 40 A: I was umm ... doing ... homework.
 41 OK. I was doing homework.

事例1では、教師が生徒に前日の午後5時頃に何をしていたかをAに尋ねた(11行目)。ここでは、過去進行形での発話が求められたが、それに対してAは、“I was mmm... homework, playing homework mm”と答えた(12行目)。Aの発話は、過去進行形に表現の正確さを欠くばかりか、「宿題をする」という動詞として“play”を誤用している。教師は、誤りを含む句を質問調で反復した(援助水準2)が、このやりとりに他の生徒も参加し、doingやstudyingというつぶやきが聞こえてきた。教師は、その後、15行目で「ん?」という表情(援助水準1)や、18行目で誤りとなっている語を日本語表現(「宿題で遊ぶ」)を添えて指摘(援助水準3)し、生徒Aの現下の発達水準を探っている。この時、教師は、生徒Aと視線を共有し、彼とのZPDを構築しつつも、他の生徒もそのやりとりに参加できるようにスペースを生み出していた。最終的には、他の生徒をやりとりに参加させながら、「正しい表現を教える」というもっとも明示的な援助を与えている。この援助によって、生徒Aは、40行目で“I was umm ... doing ... homework.”とたどたどしさはあるものの、正しい表現で発話することができている。

事例1のビデオとトランスクリプトを担当教師が見直した結果、これまでなら、生徒のエラーに対しては、すぐに誤りを正すか、他の生徒の正しい発話を取りあげるなど、効率性を求めることが多かったが、今回の授業では、生徒のどの発話を取りあげるかに意識を向け、理解できている生徒も、やりとりに参加することで、自分自身の理解をさらに深めたり、発見してくれたりすることを期待した、という振り返りがあった。このように、教師がDAを意識して、学習者と応答することで、教室のディスコースへの参加構造が変化し、学習者の学びが豊かになることが示された。

(2) 中学校の英語授業における集団的 DA 実践 2 (吉田・荒木, 2013)

上記の実践期間中に、外国語指導助手(ALT)にもDAを意識しながら生徒たちへの指導を行ってもらった。ALTは、必ずしも、教職経験が求められていないため、その指導力については、個人差が多いが、今回、DAを意識しながら、生徒とやりとりした結果、すぐに答えを与えず、生徒の反応を見ながら、援助を与えたり、援助発話の必要な部分を音的に強調するなどの工夫が見られた。

(3) 中学校の英語授業におけるチーム・テ

イーティング実践 (Yoshida, 2016)

目的：教室での指導体制を日本人英語教師 (JTE) と ALT によるチーム・ティーチングに拡大し、さらに複雑な教室のディスコースの中で、どのような教師の発話によって生徒の学びが援助され、ZPD が構築されているかを観察分析した。

実施時期および対象：実施時期は、平成 26 年 10 月、対象は、公立中学校 1 年生 24 名であった。

手続き：上記の実践と同様に DA の原理を意識しながら、授業を展開した。今回は、教師も参加する言語活動の中であったが、二人の教師の間に見えない壁があるという前提で、一方の教師の発話(発問)を生徒が受け取り、その発話内の人称や平叙文を質問に変えるなど、言語形式面を変化させ、他方の教師に英語で伝えるというものであった。この活動の中で、教師が発話(発問)の難易度の水準を変化させることで、どのように学びが深まるかを観察、分析した。

分析および結果：本研究は Yoshida (2016) に記載しているため、分析の詳細は割愛するが、人称変化や平叙文を疑問文に変換する単純なパターンプラクティスになりかねない活動であっても、教師が、その時々を生徒の反応に対する見立てとそれに基づいて課題の難易度を上げながら活動を進めることで、教室内のディスコースが徐々に複雑になり、生徒の多くが参加可能な ZPD が構成される過程が観察・分析できた。また、二人の教師と生徒たちが、学びを深めていく様子は、team-teaching から team-learning (Tajino & Tajino, 2000; Tajino & Smith, 2016) への変化の過程であったとも言える。

(4) 中学校での英語授業のグループワークにおける生徒間での DA 使用

目的：(1)および(2)で取り組みを行った中学校での英語授業において、教師が行っている DA を、明示的に生徒たちに指導し、ペアワークやグループワークでの相互行為で、協同学習が深まるかどうかを調査した。

実施時期および対象：実施時期は、平成 26 年 1～2 月、対象は、公立中学校 1 年生 24 名であった。

手続き：中学生にペアワークやグループワークで、お互いの学びをサポートする声かけの方法として、以下のような援助水準を与えた上で、英語による簡単なやりとりをさせた。援助 1 沈黙する(「ん?」という表情)。援助 2 誤りを含む句を質問調で反復する。援助 3 誤りとなっている語を指摘する。つまり、相手の発話内容に間違いがある事に気づいたら、すぐに正解を与えたり、その間違いを訂正せずに、相手の気づきを促すような発話を行うよう指導した。

分析および結果

生徒同士のやりとりの音声については、分析が十分に進まず、実際の相互行為中の学び

の変化を明らかにするまでにいたらなかったが、生徒に対する事後の聞き取りでは、「すぐに相手が答えを言ってくれなかったので考える機会になった」というポジティブな回答がある一方、「相手の気づきを促すような援助として、どの水準が適切なのかの判別が難しかった」という意見があった。このような反応から、教師による援助が、理論にもとづいた専門性の高い技術であり、今後の教員養成や研修でも指導することが必要な技術である事が言える。

本報告書では、(1)～(4)のように実際の中学校での英語授業場面における DA の教育的効果、あるいは、DA を支える社会文化的理論の原理に基づく教育実践のあり方を調査研究した。授業者が、原理に基づく実践方法を理解し、それを意識しながら、授業を行うと、生徒が誤りを起こした際も、すぐに正解を示すのではなく、教師と生徒の双方で ZPD を構築しながら、その生徒の潜在的能力を伸ばすことが可能となること、また、これまで典型的に見られた IRE といったコミュニケーションパターンから、多くの生徒が参加可能なディスコースを作ることができることが示された。社会文化的理論に基づく DA の実践を今後、教員養成や教員研修などで広く教示することで、質の高い英語授業を展開することが可能になるのではないだろうか。

<引用文献>

- Davin, K. J. (2011). *Group dynamic assessment in an early foreign language learning program: Tracking movement through the zone of proximal development*. [Unpublished doctoral dissertation]. University of Pittsburgh.
- Lantolf, J. P., & Poehner, M. E. (2011). *Dynamic assessment in the foreign language classroom: A teacher's guide* (2nd ed.). University Park, PA: CALPER Publications, Penn State University.
- Lantolf, J. P., & Thorne, S. L. (2006). *Sociocultural Theory and the Genesis of Second Language Development*. New York: Oxford University Press.
- Poehner, M. E. (2008). *A Vygotskian Approach to Understanding and Promoting L2 Development*. Springer.
- Tajino, A. & Smith, C. (2016). Beyond team teaching: An introduction to team learning in language education. In Tajino, A., Stewart, T., & Dalsky, D. (Eds.) *Team Teaching and Team Learning in the Language Classroom: Collaboration for Innovation in ELT*. Routledge.
- Tajino, A., & Tajino, Y. (2000). Native and non-native: what can they offer?

Lessons from team-teaching in Japan.
ELT Journal, 54(1)3-11.

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 4 件)

今井裕之・吉田達弘. 「英語授業における学びを再考する - 社会文化的アプローチから - 」, 関西英語教育学会 2013 年度 (第 18 回) 研究大会. 平成 25 年 6 月 8 日, 関西国際大学(兵庫県尼崎市)

吉田達弘, 「英語教育におけるダイナミック・アセスメントの可能性」ヴィゴツキー学協会 第六回研究集会, 平成 25 年 8 月 4 日, 神戸市勤労会館.

吉田達弘・荒木美景, 「学習者の意味生成を援助するダイナミック・アセスメントの試み」全国英語教育学会第 39 回札幌研究大会, 平成 25 年 8 月 10 日, 北星学園大学(北海道・札幌市)

吉田達弘, 「社会文化的理論は小学校英語教育の実践研究に対してどのような貢献ができるのか」(課題別分科会「小学校英語教育に期待できることと課題: 各研究分野からの示唆」)日本児童英語教育学会(JASTEC) 第 36 回全国大会, 平成 27 年 6 月 27 日, 大阪成蹊大学(大阪市).

[図書](計 2 件)

吉田達弘.(共著), 「英語教育におけるダイナミックアセスメントの可能性」, 山岡俊比古先生追悼論文集編集委員会(編)『第 2 言語習得研究と英語教育の実践研究—山岡俊比古先生追悼論文集—』(開隆堂出版), 2014 年. p.15-28.

Yoshida, T. (共著), Chapter 3 A sociocultural analysis of effective team teaching in a Japanese language classroom. Tajino, A., Stewart, T., & Dalsky, D. *Team Teaching and Team Learning in the Language Classroom: Collaboration for innovation in ELT*, (Routledge), 2016, p.31-50.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 達弘 (YOSHIDA, Tatsuhiro)
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号: 10240293

(2) 研究分担者

今井 裕之 (IMAI, Hiroyuki)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号: 80247759

松井 かおり (MATSUI, Kaori)

朝日大学・経営学部・准教授
研究者番号: 70421237

テラー・マーク (TAYLOR, Mark)
兵庫県立大学・環境人間学部・講師
研究者番号: 40514443

安川 佳子 (YASUKAWA, Keiko)
神戸山手大学・現代社会学部・准教授
研究者番号: 20636352